

千島列島における人類活動史の考古学的総合研究 (IV)

—特に北方四島の先史文化研究を中心に—

右代啓視・鈴木琢也・高橋勇人・天方博章・野澤緯三男・谷内紀夫・
スコヴァティツィーナ, V. M.

Key Words 続縄文文化 (Zoku-Jomon culture)、アイヌ文化 (Ainu culture)、史跡 (Historic site)、学術交流 (Academic exchange)、文化交流 (Cultural exchange)

1 はじめに

北海道からカムチャツカをつなぐ千島列島は、旧石器文化からはじまり、アイヌ文化に至るまでの人類活動史について空白の研究領域であり、基礎的なデータが欠落している地域である。しかも、北海道の先史文化あるいはアイヌ文化の研究にとって、東の千島ルートは北のサハリンルートと同様に異文化の交差・接触を明らかにできる要素をもっている。東のルートでは、歴史的な画期や文化的な変容、過去の自然環境の変遷、自然資源の活用史など、千島列島における歴史・文化の解明につなげる基礎的研究の推進が重要となってくる。

千島列島を含めた北方四島の研究は、「北方文化共同研究事業」の一環として、2005（平成17）年～2009（平成21）年にかけて本格的に取り組むこととした。右代・鈴木ほか（2008、2010）は、この研究で歴史・文化資源の活用の可能性を探ることを目的に国後島古釜布郷土博物館の収蔵資料を中心とする先史文化の遺跡群の時代性と文化遺産の活用について指摘した。さらに、そこで北海道や北方四島の先史文化資源をつうじた文化交流や歴史教育の推進、観光資源への活用など様々な展開が期待できることを指摘した。このことを実現するためには、遺跡や史跡などの文化財の基礎的研究が必要であり、人類が遺した文化遺産を調査し、時代、種類、規模などを記録することや歴史認識をロシア側の研究者と共通のものにすることが求められる。そこには、北方四島の領土問題をこえる地域史や民族学的研究はもとより、日本史や世界史にまで展開できる重要な文化遺産が存在するからである。

この研究成果を踏まえ、2010（平成22）年～2013

（平成25）年まで「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり」として研究プロジェクトを立上げ実施してきた。また、外部資金として科学研究費補助金（基盤研究B）「千島列島における先史文化の考古学的基礎研究—特に北方四島を中心に—」（研究代表者：右代啓視）、科学研究費助成基金助成金（基盤研究C）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」（研究代表者：鈴木琢也）などを使用し実施してきた。右代・鈴木ほか（2011、2012、2013、2014、2015）は、この研究プロジェクトを中心に北方四島における先史文化の基礎データの収集のため、国後島と色丹島での遺跡調査と、国後島古釜布郷土博物館を拠点とする北方四島の郷土史、民族学、民俗学、歴史学などの専門家との学術交流を進めた。この研究成果として、第一に、国後島、色丹島の現地調査により遺跡の分布やその特性などの基礎データを収集することができた。国後島では65カ所、色丹島では22カ所の遺跡を確認した。これは戦後はじめての大きな成果であり、両島の未調査地域を調査することで、さらに遺跡数が増えることを指摘してきた。また、千島アイヌに関する現地調査や国内調査を実施し、特に千島アイヌの特徴的な民族資料として、国内に現存する植物製民具であるテンキを集成し、基礎的なデータを報告した。第二に、学術的な交流をつうじ、文化遺産の重要性、歴史認識など両地域間の博物館交流を積極的に進めてきた。この内容は北方四島の専門家との共通課題として、北海道と北方四島の「歴史・文化・自然環境の活用」をテーマに、文化財保護、遺跡・史跡、博物館などの調査をつうじ、博物館の運営や経営、持続可能な管理体制、文化財保護の実態、先史文化を含む北海道史など多くの情報を提供し、将来に向けた両地域の

歴史・文化活動について議論してきた。特に、アイヌ民族の歴史・文化については、北海道の各地域の博物館に収蔵されている民族資料や有形・無形文化財の保存・保護の状況、または伝承活動の状況などを共同で調査した。この学術交流をつうじ、歴史・文化の認識、文化財保護の思想、博物館の資料管理、展示手法、教育普及活動などの運営や経営、共通する多くの視点が持てたことが最大の成果である。例えば、北方四島と知床半島の歴史・文化・自然などは、共通する環境にあることから人類が共有する自然・文化遺産が存在した地域であり、さらに千島列島全域に広がる認識をもてた。さらに、2010（平成22）年から遺跡や史跡を活用した文化財保護と歴史学習として、国後島の小学生が遺跡の草刈りを行い、現地で先史文化の歴史学習などが実施されている。すなわち、学術交流でえた成果が学校教育や社会教育の現場で積極的に運用・活用されるようになった。

このように北方四島では、様々な制限があるなか研究成果を着実にあげてきた。さらに研究を継続・発展させるため、新たに「北方四島の考古学研究」とした総合研究プロジェクトを立上げ、2015（平成27）年から4カ年の計画で本研究を実施することとした。本研究は、北方四島を含めた千島列島の人類活動史を総合的に明らかにすることを大きな視座として、特に北方四島の先史文化を同島の研究者と共同研究することで共通の認識をもつことが第一の目的である。第二に、この研究プロジェクトをつうじ学術交流を進め、両地域の博物館交流や歴史認識をさらに深め、学術交流の友好関係を進展させることを目指すものである。

ここでは、このプロジェクト研究の最終年である2018年に実施した北方四島の第IV次学術調査と調査でえた資料の分析について、考察を加え報告するとともに、北方四島の専門家を招聘して実施した学術交流について報告する。さらに、釧路市、根室市で実施したシンポジウムの成果について概要を示すこととする。また、北方四島関係者が2000年に勇留島で採集された考古資料の寄贈を受けたので報告する。

2 北方四島の遺跡調査

北方四島での考古学的調査は、2006（平成18）年～2014（平成26）年にかけて継続的に研究を進めてきた。これまでの北方四島の考古学的調査は、右代・鈴木ほか（2008、2010、2011、2012、2013、2014、2015）で、その成果を報告してきたところである。そのなかで千島アイヌのテンキの物質文化的な研究では、アリューシャン列島、さらには北米大陸との文化的な交流、民族的な接触で成立する可能性を指摘してきた。さらに、右代

（2014a、2014b）は、千島列島に北方四島を含めた先史文化について、国後島と色丹島の先史文化をみると連綿と文化が築かれていたわけではなく、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化と、その文化のなかでも限られた時期にしか遺跡が存在していないことを総括的に指摘した。また、北方四島には、カムチャツカ半島地域の物質文化の影響を受けた遺物がみられることを指摘するとともに、確実に中部千島までは縄文文化晩期、続縄文文化の遺跡が存在すること、さらにオホーツク文化は北千島まで拡がりをもつこと、アイヌ文化ではこの地域に特徴的にみられる内耳土器がカムチャツカ半島南部まで拡がり、チャシ・コツが北千島まで拡がりをもつことを指摘してきた。さらに、鈴木（2011、2016）は、これまで実施してきた北方四島の学術データを基に古代・中世にかけての北方交易のルートを明らかにしてきた。

これらの研究成果を基に、本研究の北方四島の現地調査は、これまでと同様に内閣府、外務省をはじめ、独立行政法人北方領土問題対策協会、北方四島交流北海道推進委員会などとの協力、連携をはかり「ビザなし交流・専門家交流事業」の枠組みのなかで実施することとした。特に、北方四島の国後島、色丹島の未調査地域、未調査の択捉島、歯舞群島の調査を積極的に取組むこととし、4カ年の現地調査を実施することとした。

2015（平成27）年の第I次学術調査の成果は、国後島中部太平洋側海岸域で、新たに縄文文化、続縄文文化、擦文文化の6カ所の遺跡を明らかにした。さらに、北方四島には黒曜石の原産地がないため、遺跡から採集した試料の産地推定の分析を行い黒曜石の流通ルートについて検討を行った。方法は、黒曜石の北海道産、カムチャツカ産のデータと北方四島の遺跡から採集した黒曜石データを比較分析し、流通ルートを検討した。この結果、国後島と色丹島の石器類は、北海道の白滝産、置戸産に限られた黒曜石を素材として利用していたことを明らかにした（右代・鈴木ほか 2016）。学術交流では、北方四島の専門家と共同で「博物館と歴史・文化遺産」をテーマに北海道博物館をはじめ、小樽市と余市町の博物館、史跡・文化財、歴史・文化などの調査を実施した。

2016（平成28）年の第II次学術調査の成果は、択捉島中部オホーツク海側海岸域と国後島中部太平洋側海岸域で、新たに縄文文化の前期、中期末から後期初頭、続縄文文化、オホーツク文化の前期末から後期、擦文文化の晩期の17カ所の遺跡を明らかにした。択捉島の考古学的学術調査は、戦後初めてオホーツク海側の別飛と紗那、ナヨカの地域で実施したものである。さらに、学術交流の調査は、北海道南部地域においてテーマを「北海道南部の歴史・文化」と「災害復興と観光」として共同

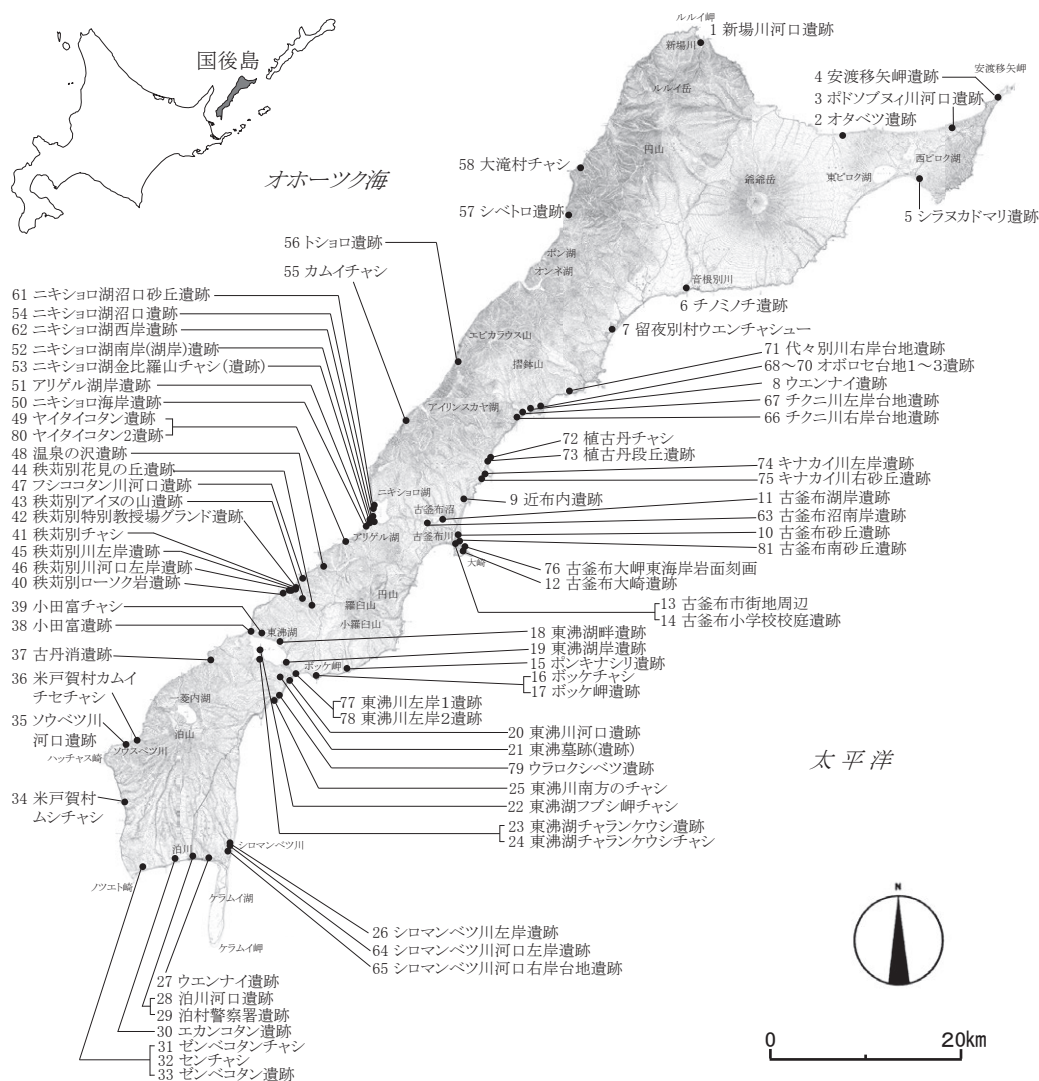


図1 国後島の遺跡分布

(59: マイアチヌイ川河口遺跡、60: ベスノイマイアチヌイ川河口遺跡は、遺跡の位置を未確認である。国土地理院、数値地図50000 (地図画像)、北方四島の一部を使用)

調査を実施した。この共同調査のテーマは、北方四島の専門家からの要望であり、共通課題として設定したもので大きな成果を上げている (右代・鈴木ほか 2017)。また、Ushiro (2017) は、人類の活動史から北方四島の歴史的な位置づけを総括的にまとめた。Ushiro and Suzuki (2018) は、国後島古釜布博物館の要請もあり、同博物館所蔵の考古資料ならび遺跡について総括した。

2017 (平成29) 年の第Ⅲ次学術調査の成果は、択捉島中部オホーツク海側海岸域で、新たに縄文文化早期～前期、続縄文文化前半の3カ所の遺跡を明らかにし、アイヌ文化のチヤシ1カ所を推定した。さらに、「文化露寇」にかかわる「戸田亦太夫墓」の現況調査を行った。学術交流のパートナーとの現地研究会では、択捉島の小学生を対象とした「先史文化探検隊」が結成され、我々の現地調査の成果を活かした歴史学習や埋蔵文化財保護

の活動を実施しているとの報告をえた。北方四島で継続してきた学術交流の大きな成果となった。しかしながら悪天候のため根室での出航が遅れ、現地調査は1日だけとなり十分な調査とはならなかった。また、当初は国後島の調査も計画していたが、調査経費が十分に確保できず断念した。

北海道での学術交流調査は、四島の専門家の要望で北海道北部地域の博物館や遺跡・史跡、文化施設を対象として「北海道と樺太 (サハリン) の歴史・文化」をテーマとして実施した。この学術交流では、初めて専門家以外の交流として、天塩町の歴史・文化に係わる方々や中学生と「天塩と北方四島の歴史・文化交流会」を開催し大きな成果となった (右代・鈴木ほか 2018)。

ここに報告する第Ⅳ次学術調査は、2018 (平成30) 年の北海道博物館総合研究プロジェクト研究費と、

2018年から外部資金である科学研究費助成金（基盤研究B）「北方四島と千島列島における人類活動史の考古学的研究」（研究代表者：右代啓視）などを使用し実施した。

北方四島の現地調査は、国後島、択捉島で実施した。また、学術交流は、北方四島の研究者を招聘し、遠軽町、旭川市、深川市、千歳市で共同調査を実施した。研究の公開事業として、釧路市と根室市でシンポジウムを開催した。

(1) 国後島の遺跡調査

この調査は、7月20日～7月23日にかけて、太平洋側に位置する古釜布で実施した。調査メンバーは、右代啓視、鈴木琢也、高橋勇人（釧路市埋蔵文化財センター）、天方博章（羅臼町郷土資料館）、渡邊直子（通訳）、川嶋康徳（外務省同行者）である。

7月20日、根室港琴平岸壁の出港は定刻どおり午前9時30分に出航、古釜布には午後1時に到着した。入域手続を済ませ、古釜布には午後3時に上陸した。

調査地域は、泊の東側に位置するシロマンベツ川周辺、国後島中部域のオホーツク海側に位置するヤンベツ海岸周辺を受入側と計画したが、出発直前にロシア側から調査地域の制限がかかり、古釜布市街周辺の調査とせざるをえなくなった。午後5時から受入側のメンバーと調査日程の打合せを行った。打合せは受入側の古釜布郷土博物館ミチャーエヴァ、I. G. (Митяева, И. Г.) 館長、スコヴァティツィーナ、V. M. (Суковатицына, В. М.) 資料管理者（前館長）、南クリル自治区行政文化・スポーツ青少年対策課ジャールカヤ、A. P. (Жаркая, А. П.) 課長代理、同観光交流課ブタコヴァ、T. V. (Бутакова, Т. В.) 主任専門官と我々調査メンバーで行った。その結果、博物館の視察と郷土史クラブとのワークショップ、古釜布砂丘の調査を実施することとなった。

7月21日は天候も悪く雨で朝から、2017年4月25日に仮オープンした古釜布郷土博物館を視察した。同博物館では、常設の展示と収蔵庫、書庫を見学し、専門的な意見を交換した。考古学的資料はもとより、明治～昭和の収蔵資料についても専門的な情報を提供した。現在の博物館の体制は、館長1名、資料管理者1名、学芸員1名、研究員1名の4名である。この時点の博物館は仮オープンであり、ジオラマや模型、パネル、映像機器などの新規導入を計画しているとのことであった。その後、同博物館は、展示設計などをサンクトペテルブルグやマリ・エル共和国に在住する専門家に依頼し、2018（平成30）年12月20日にオープンしている。

同博物館が企画した専門家交流一環として、郷土史クラブとのワークショップを開催した（写真1-6）。この

ワークショップでは、国後島の先史文化と採集された日本製陶磁器、日本文化などの学習を行った。郷土史クラブは、同博物館の初代館長プイジャノフ、F. I. (Пыжьянову, Ф. И.) 氏が小学生を対象に組織したサークルである。ここ数年活動を停止していたが、博物館の仮オープンを記念し、郷土史クラブの活動を再開したとのことである。このクラブの目的は、国後島の歴史・文化などの学習機会を子どもたちにあたえることであるという。参加者は、小学生の9～11才の4名であったが、国後島の歴史・文化を博物館の展示をつうじ学習し、国後島で収集された日本製陶磁器を実際に手にしながら、時代や使用法などを学習した。さらに、国後島の歴史・文化や日本文化についての対話を行った。翌日、参加した子どもの報告を受けた親から感謝の連絡をうけた。

午後からは古釜布市街を散策し、街の整備状況や4階建のアパートの新設計画、青少年芸術文化施設の建設計画、海岸道路の整備計画（アスファルト舗装や歩道、街灯、住民が憩える環境整備など）、サッカー・ホッケー場整備（シャワー・更衣室の新設）や今後の計画などの説明を受けた。

その後、博物館で学術交流の意見交換を行った。受入側の提案として、来年以降の現地調査は1～2週間ほどの調査期間の確保と、調査地域はびざなし交流日ロ代表者会議で詳細な調査地域の情報を示すことが求められた。これまでの手続きとは違う詳細な情報が必要であるとのことであった。また、受入側は、この学術交流について高く評価しており、今後も歴史・文化の学術交流の継続を強く要望することが示された。調査の長期滞在の理由としては、これまで2日間の滞在では十分な対応ができなかったこと、1～2週間ほどの長期滞在であれば、調査地の立入の制限について調整や対応も可能であるとのことである。また、郷土史クラブと専門家との交流を発

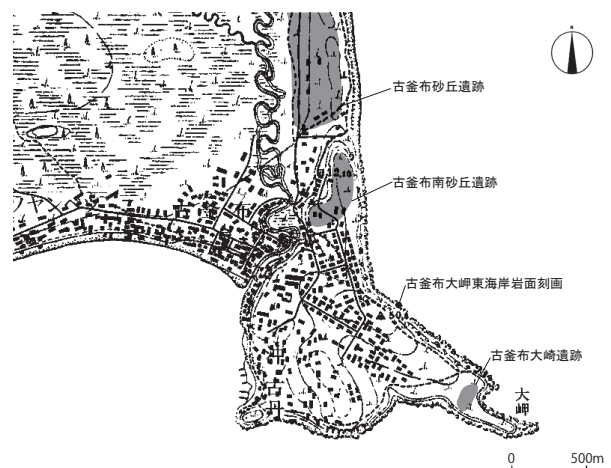


図2 国後島古釜布周辺の遺跡分布
（国土地理院、数値地図50000（地図画像）、北方四島の一部を使用）

表1-1 国後島の遺跡一覧 (1)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホーツク文化	擦文文化	アイヌ文化			
1	新場川河口遺跡						○	○	○			遺物包蔵地	続縄文土器、オホーツク式土器、突起付磨製石斧、ナイフ	2006年調査
2	オタバツ遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器	2006年調査
3	ボドソプヌイ川河口遺跡							○	○			遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器	2006年調査
4	安渡移矢岬遺跡							○				遺物包蔵地	靴形石器、ナイフ、スクレーパー、ドリル	2006年調査
5	シラスカドマリ遺跡											竪穴住居址		
6	チノミノチ遺跡(チャシ)											竪穴住居址		
												チャシ(土塁)		
7	留夜別村ウエンチャシ										○	チャシ		
8	ウエンナイ遺跡											竪穴住居址		
9	近布内遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
10	古釜布砂丘遺跡(古釜布アイヌ地)		○		○	○	○	○	○		○	竪穴住居址	幣舞式土器、三日月形石器	2006、2010、2011、2012、2015年調査
												竪穴住居址	興津式土器、石匙	
												墓	後北C ₂ ・D式土器、石匙、石槍、石鏃(無柄)、ガラス玉、人骨	
												竪穴住居址	オホーツク式土器	
												竪穴住居址	ガラス玉、小玉(ジャスパー製)	
												貝塚	オホーツク式土器、有角石斧、ガラス製玉	
												遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、ナイフ、擦切磨製石斧、突起付磨製石斧、磨製石斧	
11	古釜布湖岸遺跡(古釜布湖付近)								○			竪穴住居址	オホーツク式土器	
12	古釜布大崎遺跡											竪穴住居址		2012年調査
13	古釜布市街地周辺	○									○	遺物包蔵地	有茎先頭器、宋銭(景德元宝)、鉄鍋、人骨	
14	古釜布小学校校庭遺跡									○		竪穴住居址	蔵手刀(?)	
15	ボンキナシリ遺跡									○	○	竪穴住居址	オホーツク式土器	
												遺物包蔵地	オホーツク式土器、トビニタイ土器	
16	ボッケチャシ										○	チャシ(壕)		
17	ボッケ岬遺跡											竪穴住居址		
18	東沸湖畔遺跡								○			竪穴住居址	土器、石器、骨	
												遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器	
19	東沸湖岸遺跡(東沸川岸遺跡)											竪穴住居址	縄文晩期土器	2006年調査
												竪穴住居址	後北式土器	
												竪穴住居址	オホーツク式土器	
												遺物包蔵地	続縄文土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石槍、靴形石器	
20	東沸川河口遺跡(東沸遺跡)				○			○	○	○	○	竪穴住居址	縄文土器	2006年調査
												竪穴住居址	オホーツク式土器	
												遺物包蔵地	北筒式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、トビニタイ土器、靴形石器、突起付磨製石斧	
21	東沸墓址(遺跡)											○	墓	墓標
22	東沸湖フシ岬チャシ											○	チャシ(2重の壕)	
23	東沸湖チャランケウシ遺跡											○	竪穴住居址	
												遺物包蔵地	煙管	
24	東沸湖チャランケウシチャシ											○	チャシ(土塁)	
25	東沸川南方のチャシ											○	チャシ(土塁)	
26	シロマンベツ川左岸遺跡						○					遺物包蔵地	幣舞式土器	2006年調査
27	ウエンナイ遺跡											竪穴住居址		
												竪穴住居址		
28	泊川河口遺跡(泊遺跡)				○			○	○	○		遺物包蔵地	北筒式土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石鏃、ナイフ、ドリル、突起付磨製石斧	2007年調査
29	泊村警察署遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	突起付磨製石斧	
30	エカンコタン遺跡								○	○		遺物包蔵地	続縄文土器、オホーツク式土器	2010年調査
31	ゼンベコタンチャシ											○	チャシ(2重の壕)	(ゼンベコタン墓址)
32	センチャシ(セン墓址)											○	チャシ(2重の壕)	
33	ゼンベコタン遺跡											竪穴住居址		
34	米戸賀村ムシチャシ											○	チャシ	
35	ソウスベツ川河口遺跡(ソウスベツ川)											○	墓	石鏃、人骨、銅銭(穿孔あり)
												遺物包蔵地	寛永通宝	
36	米戸賀村カムイセチャシ											○	チャシ	
												竪穴住居址	オホーツク式土器	
37	古丹消遺跡								○	○	○	遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、石斧、石器	2006年調査
												竪穴住居址	土器片、銅銭(穿孔あり)、木炭、灰、焼土	2006年調査
38	小田富遺跡								○	○	○	○	墓	太刀、鐔、装飾品(銀製)、銅銭(穿孔あり)、石鏃
												遺物包蔵地	幣舞式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器	
39	小田富チャシ											○	竪穴住居址(方形、3カ所)	
												チャシ(2重の壕)		
40	秩羽別ローソク岩遺跡											遺物包蔵地	人骨	

表1-2 国後島の遺跡一覧 (2)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホーツク文化	擦文文化	アイヌ文化			
41	秩苅別チャシ										○	チャシ		
42	秩苅別遺跡特別教授場グラウンド遺跡										○	遺物包蔵地	土器片、太刀、鐔、人骨、銅銭(穿孔あり)、銅銭(清の光緒帝(徳宗)32年、1906年)	
43	秩苅別アイヌの山遺跡											竪穴住居址		
44	秩苅別花見の丘遺跡											竪穴住居址		
45	秩苅別川左岸遺跡								○			竪穴住居址	後北C ₂ ・D式土器	2009、2011年調査
46	秩苅別川河口左岸遺跡								○			遺物包蔵地	オホーツク式土器	2009、2011年調査
47	フシココタン川河口遺跡											竪穴住居址		(フシココタン川付近)
48	温泉の沢遺跡										○	竪穴住居址(方形と円形、計3カ所)		
												遺物包蔵地	石鏃、黒曜石製石器、太刀	
49	ヤイタイコタン遺跡								○	○		遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、鈴谷式土器、オホーツク式土器	2006年調査
50	ニキショロ海岸遺跡								○	○		竪穴住居址	縄文晩期土器群、石製小玉、有柄石鏃	
												遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器	
51	アリゲル湖岸遺跡(ニキショロシブチャリ川付近)								○	○	○	竪穴住居址	縄文晩期土器、石匙、炭、	
												遺物包蔵地	縄文晩期土器群、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石匙、有柄石鏃、無柄石鏃	2006、2010年調査
52	ニキショロ湖岸遺跡(ニキショロ湖付近)								○	○	○	竪穴住居址	オホーツク式土器	
												石塚	有柄石鏃(緑が鋸歯状、赤褐色)、石鏃(黒曜石製)	2006年調査
												遺物包蔵地	縄文晩期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、擦文土器、トビニタイ土器、ドリル、スクレーパー、石鏃、石槍、突起付磨製石斧	
53	ニキショロ湖金比羅山遺跡(チャシ)								○		○	竪穴住居址	オホーツク式土器	
												チャシ(2重の塚)	太刀	2012年調査
54	ニキショロ湖沼口遺跡								○		○	貝塚	オホーツク式土器、鉄鍋	2010、2012年調査
												墓	盤石、人骨	
55	カムイチャシ										○	チャシ		
56	トショロ遺跡											竪穴住居址		
57	シベトロ遺跡					○	○	○	○	○	○	遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
58	大滝村チャシ										○	チャシ		
59	マイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)											遺物包蔵地	ドリル、ナイフ	2006年調査
60	スベノイマイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)						○		○		○	遺物包蔵地	縄文後期土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
61	ニキショロ湖沼口砂丘遺跡								○			竪穴住居址、貝塚		2012年調査
62	ニキショロ湖西岸遺跡								○	○		竪穴住居址		2010年調査
63	古釜布沼南岸遺跡											遺物包蔵地	剥片(黒曜石)	2010年調査
64	シロマンベツ川河口左岸遺跡									○		遺物包蔵地	オホーツク式土器	2011年調査
65	シロマンベツ川河口右岸台地遺跡		○						○			遺物包蔵地	石刃鏃、つまみ付きナイフ、縄文土器	2011年調査
66	チクニ川右岸台地遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
67	チクニ川左岸台地遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
68	オボロセ台地1遺跡									○		竪穴住居址(方形1)		2015年調査、縄文
69	オボロセ台地2遺跡											竪穴住居址(円形3)		2015年調査、縄文
70	オボロセ台地3遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
71	代々別川右岸台地遺跡								○	○		竪穴住居址(円形7、フライパン形3、方形2)	下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、石器類	2015年調査、縄文
72	植古丹チャシ										○	チャシ(塚)		2016年調査
73	植古丹段丘遺跡								○			竪穴住居址(円形1)		2016年調査、縄文
74	キナカイ川左岸遺跡								○			竪穴住居址(円形3)		2016年調査
75	キナカイ川右岸砂丘遺跡								○			竪穴住居址(方形1)		2016年調査
76	古釜布大岬東海岸岩面刻画											線刻画		2016年調査、明治～昭和
77	東沸川左岸1遺跡								○	○		竪穴住居址(方形15)	後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、石器類	2016年調査
78	東沸川左岸2遺跡								○	○	○	竪穴住居址(円形42、フライパン形14、六角形2、方形12)	下田ノ沢式土器、剥片(黒曜石)	2016年調査
79	ウラロクシベツ遺跡									○		竪穴住居址(方形4)		2016年調査
80	ヤイタイコタン2遺跡								○			竪穴住居址(六角形1)		2016年調査
81	古釜布南砂丘遺跡								○			竪穴住居址(円形6)		2018年調査

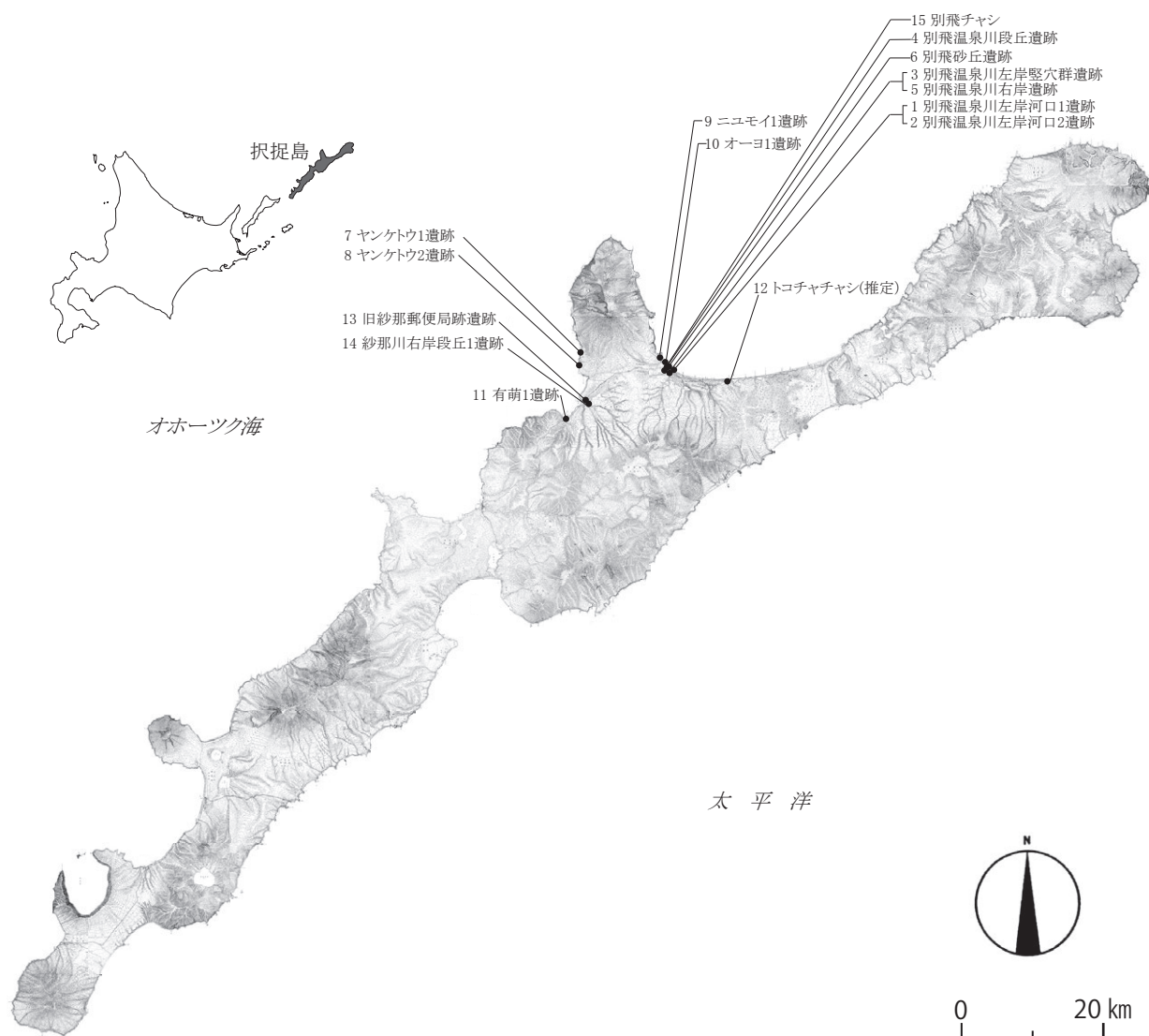


図3 択捉島の遺跡分布 (国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

展させたいとの要望もあった。

この数年の国後島の状況について報告をうけた。特に、2018 (平成30) 年6月15日にニキショロにオープンしたサケ・マス孵化場の役割を映像で紹介し情報などを交換した。さらに、ロシア側が作成した「ビザなし交流20周年」の映像の紹介があった。

7月22日は天候に恵まれ朝から晴れで、古釜布砂丘遺跡の現地調査をミチャーエヴァ、I. G. 館長とヴォロニナ、V. A. (Воронина, В. А.) 研究員と共同で行った。かつて元島民が「アイヌ地」と呼んでいた地域で海岸砂丘の調査、遺物の散布状況について確認した。この地域では、通称ニシン釜と呼ばれる鉄製大釜の破片、続縄文文化の土器・石器などを採集し、国後島古釜布郷土博物館に収めた。鉄製大釜は推定口径約1mあり、この地域はニシンがとれなく、その代わりにサケ・マスから魚油、魚粕を生産するために使用したものと考えられる資料で

ある。午後からは、古釜布砂丘の南側に分布する砂丘の調査を行った。ここでは、新たに堅穴住居址を確認した。遺跡名は古釜布南砂丘遺跡とした (図1-81)。

7月23日、午前6時に古釜布港よりはしけ船で移動、乗船し、根室港琴平岸壁に移動する。

①古釜布南砂丘遺跡

この遺跡は、古釜布砂丘遺跡南側、現在の古釜布市街地北側にある海岸段丘下に位置する。標高は15~8mの砂丘上である (図1-81、図2、表1-2、写真1-1)。遺跡の位置は、北緯44°02'13.22"、東経145°51'46.86"である。遺跡は砂取などで著しく壊されているが、砂丘を形成する自然地形上にある。遺跡では、フライパン状に窪む、堅穴住居址6軒を確認した。遺跡の性格は集落址である。時期は、堅穴住居址の形状から続縄文文化前半の時期と考えられる。

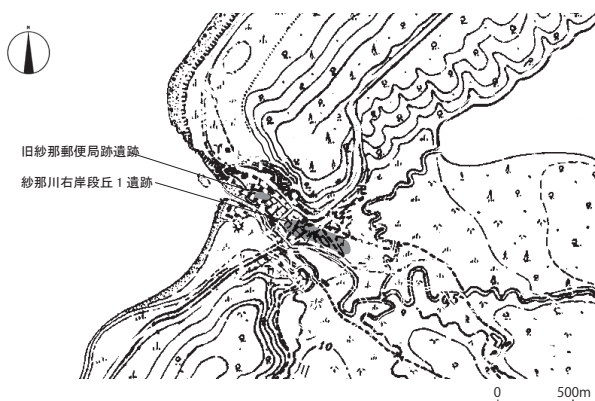


図4 択捉島紗那周辺の遺跡分布
(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

(2) 択捉島の遺跡・史跡調査

この調査は、9月14日～9月17日にかけて、オホーツク海側の別飛と紗那の地域で実施した。調査メンバーは、右代啓視、鈴木琢也、野澤緯三男・谷内紀夫（松浦武二郎研究会）、渡邊直子（通訳）、栗本一輝（外務省同行者）である。

択捉島調査地は、振別、留別、ラウス、紗那周辺で、受入側の了解を受けていた。しかし、国後島調査と同様に出発前日に調査地についての立入ができないとの連絡を受け、受入側と調整し、当初の調査地で受入可能と返答を受け根室を出発した。しかしながら、択捉島の現地に入ると「歴史・文化の専門家」は、ビザなし交流の一般訪問団と行動することしか認めないとの強い制限を受けることとなった。日程については、次のとおりである。

9月14日、根室港琴平岸壁の出港は定刻どおり午前9時30分、古釜布湾沖で入域手続を午後2時30分に終え、択捉島内岡港に向かった。

9月15日、午前7時にはしけ船で内岡港に上陸。先に示したとおり、調査地の立入制限を受けることとなった。上陸後の調査日程は、受入側と打合せを行うこととなった。受入側は、択捉島紗那図書館群エフトウシェンコ、N. I. (Евтушенко, Н. И.) 館長、択捉島紗郷土博物館エサウロヴァ、K. (Есаулова, К.) 学芸員、同博物館館長候補リズニッチ、O. (Лизнич, О.) 氏と調整をはかった。

午前中は、スポーツ文化会館にある郷土博物館、図書館の視察を行うこととし、歴史・文化の情報交換を行った。今回の調査目的の一つは、江戸末期の松前藩士の墓の現地調査であったが、この墓の発見者などと情報交換を行った。午後からは、別飛日本墓地の墓参、クリルスキーリーバク水産加工場の見学、紗那市街の散策を行い並行して遺跡調査を行った。

9月16日は、紗那日本人墓地の墓参、紗那川孵化場の見学、紗那市街地の散策を行い並行して遺跡や日本建造物の現況について調査を行った。午後5時、内岡湾か

らはしけ船で移動、乗船し国後島古釜布沖に移動する。

9月17日、午前7時に出域手続を終え、根室港琴平岸壁に移動する。

この調査で発見した遺跡、江戸後期の墓の史跡情報は、次のとおりである。また、択捉島紗那図書館群エフトウシェンコ、N. I. 館長と共同で、択捉島中部オホーツク海側の別飛と紗那の地域で、ビザなし交流一般訪問団の行動域で実施した（図3、表2）。

①江戸後期松前藩士の墓（史跡情報収集）

この松前藩士の墓の情報は、2018年6月に詳細は不明であったが、数人の関係者をつうじ数枚の写真が届いた。この写真を基に、択捉島に在住するロシア人から古い時代の墓を発見したので調査して欲しいとの要望を受けた。

2017年の調査では、有明に建てられた「戸田亦太夫藤原常保墓」の地点を確認したが、史跡としてその価値が評価されるものである（右代・鈴木ほか 2017）。江戸時代の北方四島の歴史は古文書や絵図などがあり、これらを含め現地で先史文化の遺跡以外に地形観察などから、当時の番屋や会所などの跡についても検討をはじめていたところであった。先の写真の情報から北方警備にあたった松前藩士の墓であることがわかったが、現地での調査が重要であり、今回の調査で現地確認を実施することを目的の一つとしていた。受入側の特段の配慮で、発見者であるシュタリョフ、S. (Шта́рев, С.) 氏から直接、発見の情報を得ることができた（写真1-7）。

シュタリョフ、S.氏は、現在、スキット社（漁業会社）のディレクターを務め、1957年生れで択捉島には40年間在住している。墓石の発見は、2016年5月に本格的に調べ15基を確認した。その内4基が倒れていた。発見した場所は、振別川の川沿いで、内陸に向かって川の右側（左岸）の高台、2本の松が目印になるとのことであった。この場所は、丸く掘った跡があった。シュタリョフ、

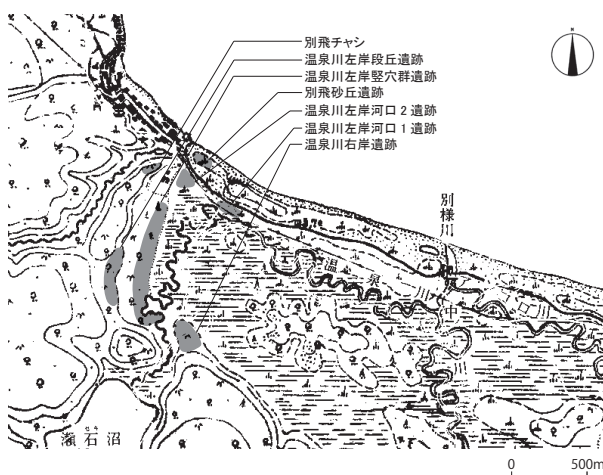


図5 択捉島別飛周辺の遺跡分布
(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

表2 択捉島の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡の時期											遺構	出土遺物	備考
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文縄文	オホーツク文化	擦文文化	アイヌ文化			
1	別飛温泉川左岸河口1遺跡							○	○			遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石器類	2016年調査	
2	別飛温泉川左岸河口2遺跡							○	○	○		遺物包蔵地	後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器、石器類	2016年調査	
3	別飛温泉川左岸竪穴群遺跡								○			遺物包蔵地 (円形、フライパン形24)		2016年調査	
4	別飛温泉川左岸段丘遺跡						○		○			遺物包蔵地 (円形、フライパン形7)	北筒式土器、下田ノ沢式土器、剥片(黒曜石)	2016年調査	
5	別飛温泉川右岸遺跡								○			竪穴住居址			
6	別飛砂丘遺跡										○	墓	2014年に砂丘の崩れで人骨と墓標を確認。現地で埋葬。	2016年調査	
7	ヤンケトウ1遺跡								○			竪穴住居址 (円形6)	縄文土器、石器類	2016年調査	
8	ヤンケトウ2遺跡				○							竪穴住居址 (円形7)	温根沼式土器、石器類	2016年調査	
9	ニューモイ1遺跡								○			竪穴住居址 (フライパン形4)	下田ノ沢式土器	2017年調査	
10	オーヨ1遺跡			○	○	○	○	○				竪穴住居址 (皿状円形3)		2017年調査	
11	有萌1遺跡			○	○							未定		2016年サハリン大学発掘、2017年調査	
12	トコチャチャシ										○	未踏査		2017年調査 (推定)	
13	旧紗那郵便局跡遺跡								○			遺物包蔵地	後北C ₂ ・D式土器	2018年調査	
14	紗那川右岸段丘1遺跡								○			遺物包蔵地	下田ノ沢式土器	2018年調査	
15	別飛チャシ										○	未踏査		2018年調査	

S.氏は、この墓石の情報について以前から知っていたが、これまで具体的に状況を確認していなかった。現地に行く手段は、車で行けるので問題がないとのことであった。

この江戸後期の墓については、毎日新聞2018年12月3日(月)・5日(水)・11日(火)付けの記事に掲載されているので参考にされたい。詳細については、今後現地調査を実施し報告することとする。

②旧紗那郵便局跡遺跡

この遺跡は、択捉島中部のオホーツク海側の紗那川右岸、標高10～11mの台地上に位置している(図3-13、図4、表2-13、写真1-2)。遺跡の位置は、北緯45°13'42.06"、東経147°52'31.30"である。遺跡は、旧紗那郵便局の建造物を解体した跡地周辺に位置しており、この台地一帯が遺跡であると考えられる。旧紗那郵便局の建造物を解体した跡地で土木工事が行われており、トレンチ状に掘られた場所から土器5点を採集した(図7、写真2)。時期は、採集遺物から縄文文化後半の時期と考えられる。

採集した土器は、図7-1～5に示したものである(写真2-1～5)。図7-1～3の土器は深鉢の胴部片で、RLの帯状縄文が施されている。図7-4・5の土器は無文であるが、胎土などの観察から同一のものである。器厚はやや厚く成形され、焼成は低温である。これらの特徴などから、図7-1～5の土器は縄文文化後半の後北C₂D式土器である。

③紗那川右岸段丘1遺跡

この遺跡は、択捉島中部のオホーツク海側の紗那川右岸段丘、標高5～6mに位置している(図3-14、図4、表2-14、写真1-3・4)。遺跡の位置は、北緯45°13'36.53"、東経147°35'59.55"である。遺跡は現在の紗那川右岸沿いに建設された住宅地にあり、宅地内の畑などで土器1点を採集した。遺跡の性格は遺物散布地で、遺跡全体の詳細は不明であるが、時期は縄文文化前半の時期と考えられる。また、福士(1991)で報告されている遺跡とは、別の地点である。

採集した土器は、図7-6に示したものである(写真2-6)。この土器は深鉢の胴部片で、RLの縄文が施され

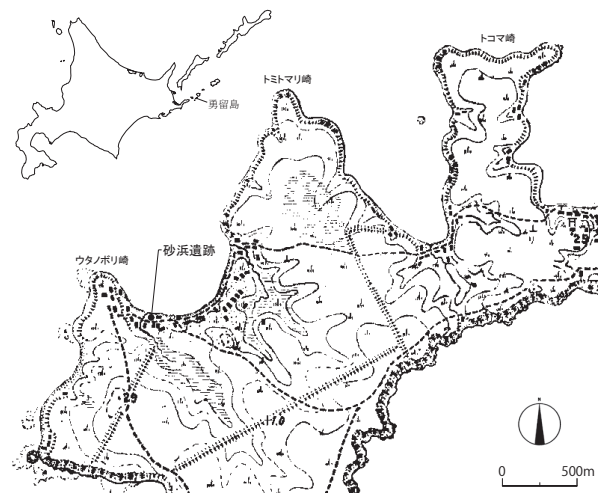


図6 勇留島砂浜遺跡
(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

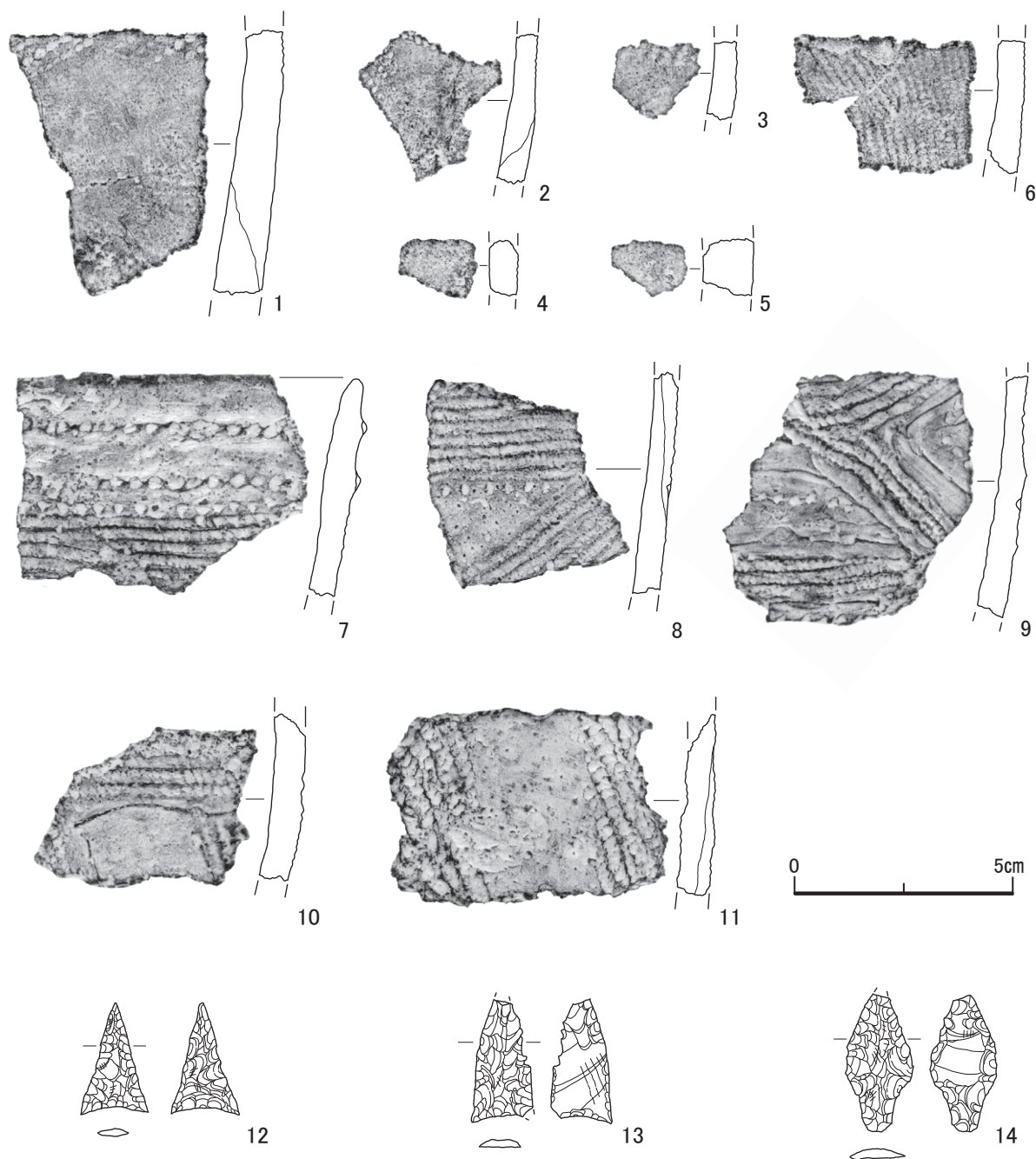


図7 択捉島旧紗那郵便局跡遺跡・択捉島紗那川右岸段丘1遺跡・勇留島砂浜遺跡採集の遺物
(1～5: 択捉島紗那郵便局跡遺跡、6: 択捉島紗那川右岸段丘1遺跡、7～14: 勇留島砂浜遺跡)

ている。器厚はやや厚く成形され、焼成はやや低温である。これらの特徴などから、図7-6の土器は縄文文化前半の下田ノ沢式土器である。

④別飛チャシ

この遺跡は、択捉島中部オホーツク海側の別飛の海岸部に発達する標高10～12mの舌状に発達した段丘に位置している（図3-15、図5、表2-15、写真1-5）。遺跡の位置は、北緯45°16'00.75"、東経148°02'00.66"である。このチャシは、鹿能（1976）の「択捉島之図」に示されているもので、遺跡の詳細は不明である。チャシの詳細な調査は、今後の課題とする。

(3) 勇留島採集遺物

この採集遺物は、2000（平成12）年に自由訪問で、勇留島に訪問した方から今年寄贈された資料である。採集した地点から砂浜遺跡とした。

①砂浜遺跡

この遺跡は、勇留島西部の北西に発達する湾の砂丘上、標高4～5mに位置している（図6）。遺跡の位置は、北緯43°25'01.04"、東経146°02'04.55"である。遺物が採集された地域は、砂浜という地名の湾岸にある。遺物は、その砂丘上で採集されている。湾岸の砂丘は浸食され、遺物が散乱していたとのことであった。

遺跡の性格は遺物散布地で、遺跡の詳細は不明であるが、時期は縄文文化後半の時期である。

採集した遺物は、土器5点、石鏃3点であり、図7-7～14に示した（写真2-7～14）。図7-7～11の土器は深鉢の胴部片で、微隆起線が貼付され、列点文、帯状縄文が施されている。器厚はやや厚く成形され、焼成は良好である。胎土は、中粒砂を比較的に多く混和している。これらの特徴などから、縄文文化後半の後北C₂D式土器である。

これにともなう黒曜石製の石鏃は図7-12～14で、無柄が図7-12・13で、有柄が図7-14である。

(4) 現地調査のまとめ

今回の国後島、択捉島の調査は、両島において希望する地域での調査ができず、計画していた研究成果とはならなかったのが残念である。しかし、制限を受けながらも受入側の協力をえて新たな遺跡を確認することができた。国後島では古釜布南砂丘遺跡、択捉島では旧紗那郵便局跡遺跡、紗那川右岸段丘1遺跡、別飛チャシの4カ所を確認した。また、勇留島で採集された遺物の報告を行った。

今後の課題は多く山積しているが、調査地域の立入制限がなく、自由に学術調査ができる環境整備の進展を期待するものである。今回の課題として、実施できなかった地域の調査を先送りしたこととなり、ロシア側の協力体制が重要である。しかも、先史時代を含め、江戸、明治から昭和の時期も元島民の方や北方四島に在住するロシア人の方からの歴史・文化の情報提供が強く求められるようになってきている。

右代・鈴木ほか（2018）で報告した小学生が中心となる「先史文化探検隊」の、その後の活動について活発に実施していることをエフトゥシェンコ、N. I. 図書館群館長から学術交流の成果として報告をうけた（写真1-8）。プログラムの充実をはかり、この中で遺跡の発見、発掘の模擬体験なども実施したとの報告をうけた。また、我々と共同で発見した遺跡の利用、文化財保護あるいは学校教育での歴史学習教材としての活用について議論を交わしたことは受入側にとって大きな成果となったであろう。

これは、永年の友好関係から生まれたものであり、共同で実施してきた学術調査が現地で活用され、地域に根ざしたものとなってきたことは大きな実績でもある。さらに、国後島古釜布郷土博物館が進める「郷土史クラブ」も同様で、歴史・文化の体験的な学習を、我々と共に実施できるようなプログラムを検討したいとの報告を受けている。

3 学術交流

この学術交流は、外務省の「ビザなし交流・専門家交流事業」の研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。招聘した専門家は、国後島古釜布郷土博物館のスコヴァティツィーナ、V. M. 前館長（資料管理、考古・民俗学）をはじめ、択捉島紗那図書館群エフトゥシェンコ、N. I. 館長（郷土史）、国後島古釜布郷土博物館のヴォローニナ、V. A. 研究員（歴史・文化交流）である。共同調査は、北方四島の専門家との歴史・文化交流として実施しているもので、訪問する専門家からの要望で「黒曜石原産地と歴史・文化遺産の保存と活用」をテーマとして現地調査を実施した。

学術交流の大きな目的は、第一に北海道の歴史・文化をどのように認識するか、第二に史跡がどのように保存され、教育資源として地域で活用されているか、第三に北海道内の博物館がどのような方法で持続可能な管理・運営をおこなっているかである。

今回の共同調査は2018（平成30）年10月11日～10月16日の6日間であり、第一に北方四島の遺跡から出土した黒曜石の原産地と、その先史文化の物流について調査を実施した。第二に北海道の歴史・文化を先のテーマで博物館や史跡、文化施設などの調査を実施した。

(1) 北海道の黒曜石原産地と歴史・文化遺産

右代・鈴木ほか（2016）は、北方四島の遺跡から出土した石器素材の黒曜石の分析から、白滝産、置戸産という結果を報告した。このことから、本調査は黒曜石原産地調査と、その流通の歴史・文化の認識を深める機会として計画した。この調査では、遠軽町が進めているジオパークの活動や埋蔵文化財センターと一体化した史跡保存と活用、特に黒曜石を活用したワークショップなどを具体的に調査することを目的とした。

① 遠軽町白滝ジオパークの活動

このジオパークは、2010（平成22）年に日本ジオパークネットワークの加盟認定を受け、世界ジオパーク登録を目指して、「地球の遺産」に歴史・文化を加えて「自然と文化の融合」をテーマに活動を展開している。ここでは、火山活動で誕生した黒曜石と人類の活動史、さらに地球と人がつながる歴史・文化や史跡の保存・活用について、白滝ジオパーク交流センター（写真3-1）、遠軽町埋蔵文化財センター（写真3-2）、丸瀬布郷土資料館（写真3-3）、丸瀬布昆虫生態館で調査した。特に、国指定重要文化財「白滝遺跡群出土品」の実見では、展示されている出土品の種類と数に圧倒され、また展示手法についても、熱心に調査されていた。

北方四島の博物館では、自然、地質、遺跡、歴史・文

化など、総合的に展示されており、博物館だけではなく地域全体で体感的に学べる環境整備が進められているなど、遠軽町白滝ジオパークの活動は、北方四島側に参考になる分部が多く、火山活動史や人類活動史、さらには地域の歴史・文化のあり方について、現場の専門家と議論を交した。また、遠軽町全体に点在するジオサイトやジオパークに関連した博物館施設や公園の整備など、興味深く意見を交わしていた。

②ワークショップと石器づくり研修

このジオパークでは、各種多様なワークショップが実施されており、実際に黒曜石の原産地で産出する状況を現場で観察し、北方四島に黒曜石が運ばれた経路、先史文化の集団がなぜ黒曜石を必要としたかなど、意見交換を進めた（写真3-4）。また、黒曜石の路頭観察や地殻変動の痕跡を探るなどのジオツアーやワークショップの実施例などを紹介しながら歴史・文化遺産の継承を検討した。さらに、国指定史跡「白滝遺跡群」の保存と活用、文化的な継承について、現在実施している事業の情報を収集した。

今回のプログラムには、白滝産黒曜石を使用した石器のつくり方を湧別川流域史研究会本吉春雄会長、遠軽町総務部ジオパーク推進課熊谷誠氏、佐野恭平氏に指導していただき、旧石器文化の石器のつくり方を研修した（写真3-5）。北方四島の専門家からは、将来的に国後島古釜布、択捉島紗那の郷土博物館でも実施したいとのことで、協力を求められたが、訪問日程延長などの解決をみて実施の検討をすることで、今後の交流の課題とした。

ここでは、地球遺産と歴史・文化遺産の重要性や価値、さらに教育資源としての活用と実践について具体的に調査することができ、国後島古釜布、択捉島紗那の郷土博物館の事業に参考とするなど大きな成果をえた。

(2) 史跡の保存・活用と博物館施設

この調査は、これまで継続的に実施してきた目的の一つであり、北海道の歴史・文化の認識を深めることを目的に遠軽、旭川、深川、千歳の国指定または北海道指定史跡と博物館施設の調査を行った。

①国指定・北海道指定史跡調査

この史跡調査では、先の遠軽町の国指定史跡「白滝遺跡群」（旧石器文化、写真3-6）、旭川市の北海道指定史跡「神居古潭堅穴群遺跡」（擦文文化、写真3-7）と「神居古潭チャシ」（アイヌ文化、写真3-8）、深川市の国指定史跡「音江環状列石」（縄文文化後期、写真4-1）、千歳市の国指定史跡「キウス周堤墓群」（縄文文化後期、写真4-2）と「ウサクマイ遺跡群」（擦文文化、写真4-3）の現状調査と保存継承、管理状況について現地で情報収集を行った。

ここでは、北方四島に現存する旧石器文化からアイヌ文化までの遺跡群をどのように歴史・文化遺産として指定するか、また、保存・管理体制づくりには何が必要かなど、さまざまな議論を進めた。しかしながら、結論はみいだせず、子どもたちが中心となる国後島古釜布郷土博物館の「郷土史クラブ」、択捉島紗那郷土博物館・図書館の「先史文化探検隊」の活動をより活発化することが大切であるとの意見が出された。本格的な遺跡や史跡の整備保存は経費の確保が課題であり、歴史・文化遺産の資源活用は両国間の今後の大きな課題であることを確認した。

②博物館施設の調査

この調査では、博物館の管理運営や展示、展示資料の調査など、専門的な視点で調査を行った。遠軽町では先にもふれたが、北方四島と共通する旧石器文化の資料、陶磁器や民俗資料を中心に調査が行われた（写真3-2・3）。旭川市では、旭川市立博物館の先史文化やアイヌ文化の展示資料、北海道内陸域の歴史などを中心に調査した（写真4-4・5）。さらに、旭川のアイヌ文化については、川村カ子トアイヌ記念館、旭川アイヌ伝承の森で、アイヌ文化の衣・食・住を中心に調査を行った（写真4-6・7）。特に、チセ（住）、一年をつうじた食文化について情報を収集した。

旭川市旭山動物園では、北方四島に生息する動物と共通するオオワシ、オジロワシ、シマフクロウ、タンチョウヅルなどの鳥類、アザラシの海獣類の生態展示の手法や関連行事の情報収集を行った（写真4-8）。動物園の調査は、現在リニューアルに向け展示計画している国後島古釜布郷土博物館、択捉島紗那郷土博物館の生物の展示について参考にしたいとの要望を受けて計画したものである。

今回、計画していた中標津町武佐ハリストス正教会の調査は、現地を訪問したが関係者が不在のため、あらためて調査することとした。

このように北方四島の専門家との共同調査は、北方領土問題を越えた共通の歴史・文化の発展につながるるとともに、今後も両地域の共通の課題を解決するため歴史・文化の学術交流は重要であることを互いに認識したことは大きな成果であった。

4 シンポジウムの開催

釧路市と根室市でシンポジウム「北方四島の過去と現在・未来に何を伝えるかー歴史・文化遺産を伝えるー」を開催し、本研究の目的と今年調査を実施してえた成果を公開した。このシンポジウムの目的は、「人類活動史から北方四島の歴史・文化遺産の継承を考える」機会と

し、参加者の方々の意見や指摘をつうじ、報告者のさまざまな問題や課題解決はもとより、将来に向けた領土問題解決に少しでも貢献できる研究成果をあげるため開催したものである。

①釧路市では、釧路市立博物館を会場に11月17日（午後1時30分～4時40分、参加者50名）、「釧路市博物館所蔵の北方四島考古資料」高橋勇人、「北方四島の先史文化交流」鈴木琢也、「武四郎がみた北方四島」野澤緯三男、「北方四島の歴史・文化遺産の継承」谷内紀夫の4本の報告の後、右代啓視のコーディネートで報告者と参加者の方々とパネルディスカッションを行った。このシンポジウムの成果として、多くの方々のご指摘や意見をいただいた。このシンポジウムを総括すると、北方四島での歴史・文化の現地調査は重要であり、継続することはもとより、これを基盤として、1) 日本国内に保管されている北方四島考古資料の調査研究と評価、2) 江戸時代では古文書などに記された記録の検討と現地調査、3) 明治～昭和の時期の文化遺産の保存継承の実施、4) 北方四島に特化した総合研究を担う博物館的施設が必要などと、広範にわたる意見や指摘があり、成果は大きかった。

②根室市では、北海道立北方四島交流センター「ニホロ」を会場に12月8日（午後1時30分～4時40分、参加者94名）、「根室市歴史と自然の資料館所蔵の北方四島資料」猪熊樹人（根室市歴史と自然の資料館）、「羅臼町郷土資料館所蔵の北方四島考古資料」天方博章、「2018年の国後島調査について」高橋勇人、「2018年の択捉島調査について」鈴木琢也、「北方四島の歴史・文化遺産の継承」谷内紀夫の5本の報告の後、右代啓視のコーディネートで釧路シンポジウムの成果を基に報告者と参加者の方々とパネルディスカッションを行った。釧路シンポジウムの成果を踏まえながら、これらを担うには「誰が、どのように進めるか？」などの組織や体制、拠点的な施設の整備が必要であるとの結論となった。また、経費的な課題を含め、地方が担うレベルではなく国を主体とする組織体制づくりが重要であるとの指摘をうけた。

両地域の参加者は、地元や元島民の方々、白糠、阿寒、羅臼など遠方からの参加もみられた。この他、北方四島関係者、博物館関係者、研究者、報道関係者などの参加もあり、発展的で有益な意見や提案、指摘があった。これらを総括すると次のとおりである。

このシンポジウムの総括は、1) 現地で実施する歴史・文化遺産の調査・研究活動の重要性、2) 各地域で所蔵されている北方四島の歴史・文化遺産資料の評価と公開の重要性、3) 歴史・文化遺産の研究成果の情報共有と公開＝博物館的な拠点施設が必要、4) 北方四島研究の

総合的拠点づくり＝具体的に進める組織が必要であるとまとめられる。さらに、時代については、三つの視点で北方四島の歴史・文化を再認識し、第一に先史時代、第二に江戸時代、第三に明治～現在までとし、アイヌ文化を含めて進めることが望まれている。

このシンポジウムの総括を基に本研究を進展させるが、先のとおり解決できない大きな課題や問題があり、歴史・文化に対する多くの要望や期待があることを認識した。今後、関係各所に協力や指導をあおぎながら研究の推進をはかっていきたいと考えている。

5 おわりに

これまで、2018（平成30）年に実施した本研究の成果と学術交流、公開シンポジウムなどについて示してきた。今年は、国後島、択捉島の考古学的調査、学術交流として専門家を招聘し、北海道内の博物館や史跡、遠軽町の白滝ジオパークの活動などの調査を実施した。この研究成果は、先にも示したが希望する十分な現地調査とはならなかったが、国後島中部太平洋側で1カ所、択捉島中部オホーツク海側で3カ所の遺跡を新たに確認した。さらに、釧路市と根室市でシンポジウムを開催し、本研究に対する意見や指摘をうけた。本研究の枠を超えた意見が多く、問題や課題解決にむけて努力しなければならないことを痛感した。

しかしながら、今年の現地調査は、制限が強くなり限られた時間の中で実施するため、新たな調査の実施については限界を感じた。一方、日ロ間では、加速化する経済交流への対応、さらには新クリル発展計画の整備が加速的に進められている現状がある。このことから、歴史・文化遺産を具体的に保存・継承するため、何が必要であるかが求められる時期にきていることも事実である。北方四島ではインフラなどの整備が進み、観光開発も活発化しており、民間レベルのサケ・マス孵化事業をはじめ、さまざまな事業が展開されている。しかし、北方四島に在住するロシア人の方々は、現地の先史時代はもとより、日本の江戸時代、明治から昭和にかけての歴史・文化に強く興味を持っているのも確かである。現状を考えると、ロシアの歴史・文化だけではなく、日本の歴史・文化も共通のものとするのが大切であると考えている。現状では失われつつある北方四島の歴史・文化遺産を早急に記録だけでものこすことが、日ロ両国にとっても、両国民にとっても大切な財産となることは間違いないことである。

本研究が果たす学術交流の役割と、解決しなければならない両国の法的な主権問題などには、多くの課題が山積しているのが現状である。しかしながら、この学術交

流では13年間続く交流のなかで多くの成果をあげ、北方四島の専門家も歴史・文化の重要性を理解し受入れるようになり、課題解決にむけた理解が一層、深まってきている。人的な学術交流はもとより、博物館交流の課題としては歴史・文化的な情報の共有化や展示活動、文化財資源の評価、文化財資源の整備・活用、収蔵資料の保存活用など、基礎的な整備が重要になってくることは間違いない。これは歴史・文化の解明、歴史教育の資源としても計り知れない成果が期待できる。

この研究が果たす学術交流は、このように北方四島の歴史・文化遺産の認識を深め、文化財保護活動や博物館活動を推進することで北方領土問題の解決に大きく貢献できるものとして期待している。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、択捉島の貴重な情報をご教示いただいた択捉島留別出身の三上洋一氏にご協力をいただいた。国後島と択捉島の現地調査では、南クリル自治区ならびにクリル地区行政関係者の方々、通訳の木村邦生氏、渡邊直子氏、外務省欧州局ロシア課外務務官中村知樹氏、川嶋康德氏、栗本一輝氏、内閣府北方対策室、北方領土問題対策協会にご協力、ご支援をいただいた。また、北方領土対策根室地域本部、北方領土復帰期成同盟などの機関、ならびに関係諸氏には多大なご協力をいただいた。学術交流の専門家招聘では、訪問先の遠軽町総務部ジオパーク推進課熊谷誠氏、佐野恭平氏、湧別川流域史研究会会長本吉春雄氏にご指導、ご協力をえた。釧路市と根室市で開催したシンポジウムでは、釧路市立博物館、根室市教育委員会にご共催を、北海道北方領土対策根室市域本部、根室市、道東3管内博物館施設等連絡協議会にご後援を、関係者の方々にご協力とご指導をいただいた。

ここに記して、感謝とお礼を申し上げるしだいである。

なお、歴史・文化学術交流の共同調査は、外務省「ビザなし交流・専門家交流事業」研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。

引用・参考文献

- 福土廣志 1991. 千島エトロフ島シャナ出土の石器について、留萌市海のふるさと館紀要 第2号:45-74.
- 鹿能辰雄 1976. 択島地名探索行. 北方風土記: 285. みやま書房.
- 鈴木琢也 2011. 北日本における古代末期の交易ルート、古代中世の蝦夷世界. 101-118. 高志書院.
- 鈴木琢也 2016. 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論. 795: 16-27.
- Ushiro, Hiroshi 2017: Study of the History of Anthropogenic Activity on the Kuril Islands and Approach to Solving Problems Existing in the Area. *Circum-pacific Archeology*. In the Memory of Igor Yakovlevich Shevkomud. The Pacific Publishing House "Rubezh", Vladivostok: 407-417.

- Ushiro, Hiroshi and Suzuki, Takuya 2018. Remains of Kunashiri Island—from Research on the Materials Collected in the Yuzhno-Kuriliskij Regional Museum—. *Research Association of Culture in Northern Islands*. Sapporo. No. 13: 39-56.
- 右代啓視 1982. 動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器. 北海道史研究30: 52-54.
- 右代啓視 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報. 19: 23-52.
- 右代啓視・手塚 薫 1991. ウルップ島アリュートカ湾岸出土の遺物. 北の歴史・文化交流研究事業中間報告: 79-86. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 1996. 千島列島採集の考古資料—長尾又六コレクション—. 根室市博物館開設準備室紀要10: 71-90.
- 右代啓視 2000. 北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ. 北の文化交流史研究事業研究報告: 35-68. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 2014a. 北方四島の考古学的研究. 中華文明の考古学: 409-424. 同成社.
- 右代啓視 2014b. 新・千島紀行—発見された千島列島の先史文化—. 函館市北方民族資料館. 函館市文化・スポーツ振興財団.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進2004. 稚内市増幌チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告. 第43号: 67-78.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進2005. 稚内市増幌川口2号チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告. 第44号: 85-102.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2008. 国後島の遺跡—古釜布郷土博物館所蔵資料調査より—. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-2007年度調査報告—. 161-182. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一2010. 国後島における先史文化の資源利用. 北方の資源をめぐる先住民と移住者の近現代史. 北方文化共同研究報告: 125-140. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2011. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (I). 北海道開拓記念館研究紀要39: 99-110.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2012. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (II). 北海道開拓記念館研究紀要40: 143-154.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高島孝宗・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2013. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (III). 北海道開拓記念館研究紀要41: 59-82.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2014. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (IV). 北海道開拓記念館研究紀要42: 97-126.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2015. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (V). 北海道開拓記念館研究紀要43: 37-66.
- 右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァティツィーナ, V. M. 2016. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (I)

一特に北方四島の先史文化研究を中心に一、北海道博物館研究紀要1: 53-72.
右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ,V.M. 2017. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究(Ⅱ)一特に北方四島の先史文化研究を中心に一、北海道博物館研究紀要2:

83-110.
右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ,V.M. 2018. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究(Ⅲ)一特に北方四島の先史文化研究を中心に一、北海道博物館研究紀要3: 163-178.



1 国後島古釜布南砂丘遺跡



2 択捉島旧紗那郵便局跡遺跡



3 択捉島紗那川右岸段丘1遺跡（河口域からの遠景）



4 択捉島紗那川右岸段丘1遺跡



5 択捉島別飛チャシ



6 国後島古釜布郷土博物館での郷土史クラブとのワークショップ



7 択捉島江戸後期松前藩士の墓についての情報収集
写真1 国後島・択捉島の調査



8 択捉島先史文化探検隊の活動（留別の竖穴群調査）

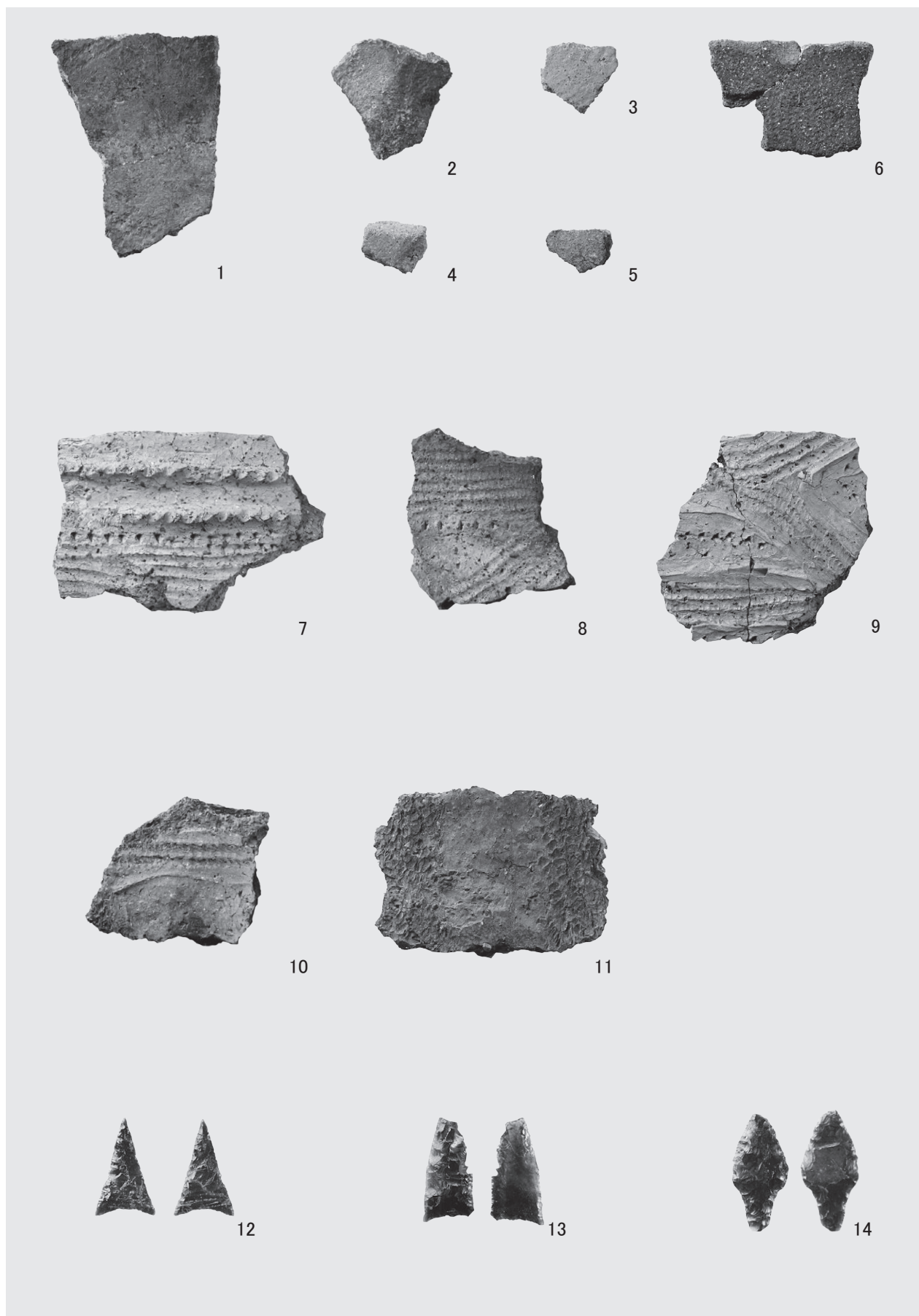
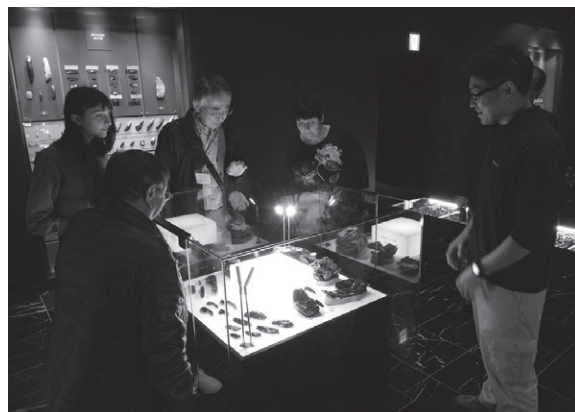


写真2 択捉島旧紗那郵便局跡遺跡・択捉島紗那川右岸段丘1遺跡・勇留島砂浜遺跡採集の遺物
(1～5：択捉島紗那郵便局跡遺跡、6：択捉島紗那川右岸段丘1遺跡、7～14:勇留島砂浜遺跡、S=2/3)



1 白滝ジオパーク交流センター（遠軽町）



2 遠軽町埋蔵文化財センター（遠軽町）



3 丸瀬布郷土資料館（遠軽町）



4 遠軽町白滝黒曜石原産地での産出状況の観察



5 遠軽町での石器づくり体験



6 国指定史跡白滝遺跡群（遠軽町）



7 北海道指定史跡神居古潭竪穴群遺跡（旭川市）

写真3 学術交流調査



8 神居古潭チャシ（旭川市）



1 国指定史跡音江環状列石 (深川市)



2 国指定史跡キウス周堤墓群 (千歳市)



3 国指定史跡ウサクマイ遺跡群 (千歳市)



4 旭川市博物館 (旭川市)



5 旭川市博物館 (旭川市)



6 川村カイトアイヌ記念館 (旭川市)



7 旭川アイヌ伝承の森 (旭川市)



8 旭山動物園 (旭川市)

写真4 学術交流調査

Comprehensive Archeological Research on the History of Human Activity on the Kuril Islands (IV):

With Particular Focus on the Research of Prehistoric Culture of the Four Northern Islands

Hiroshi USHIRO, Takuya SUZUKI, Hayato TAKAHASHI, Hiroaki AMAKATA,
Isao NOZAWA, Norio TANIUCHI, V. M. SUKOVATITSYNA

The Kuril Islands, which stretch between Kamchatka and Hokkaido, is a region that lacks fundamental data – an empty domain regarding the research of the history of human activity from the Paleolithic culture to the Ainu culture. However, as far as the research of Hokkaido's prehistoric and Ainu culture is concerned, an important factor is that it is clear that like the Sakhalin route to the north, the Kuril route to the east also crossed with different cultures.

Therefore, this research – implemented from 2015 as a four-year plan – was established as a comprehensive project to accomplish new archeological research on the Northern Territories, based the results of research carried out from 2005 to 2013. In order to develop the studies carried out to date, the aim of this research was, firstly, to comprehensively clarify the Kuril Islands' history of human activity and; secondly, to build friendly relations and further deepen museum exchanges and awareness of history in both regions by developing academic exchanges.

Our 2018 research has resulted in the new discovery of one Zoku-Jomon culture site in the Furukamappu sand dunes located on the Pacific Ocean side of central Kunashiri (Kunashir) Island, two Zoku-Jomon culture sites in the Shana district

located on the Sea of Okhotsk side of Etorofu (Iturup) Island, and one Ainu culture chashi in the Bettobu region. We have held a historical culture workshop together with a local history club at the Yuzhno-Kurilsk Regional Museum, and carried out information exchange at a seminar on Etorofu Island, including topics such as late Edo period gravestones discovered by a Russian researcher in the former Furebetsu district, and activity reports of prehistoric culture expeditions. This time, we were unable to carry out field research in our preferred regions, but regardless, we have produced research results in limited regions.

Our academic exchange endeavors have produced excellent results. We have carried out joint research on the theme of "Obsidian Points of Origin, and Conservation and Utilization of Historic and Cultural Heritages" at museums, historical sites, and ruins in Engaru Town, Asahikawa City, Fukagawa City, Chitose City. Furthermore, we held a symposium titled "Considering the Past of the Four Northern Islands, and a Message for the Present and Future: The Legacy of our Historic Cultural Heritages" in Kushiro City and Nemuro City, providing an opportunity for consideration of topics ranging from the history of human activity to the succession of historical and cultural heritages.

Hiroshi USHIRO : History Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
Takuya SUZUKI : History Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
Hayato TAKAHASHI : Kushiro City Archaeological Operations Center
Hiroaki AMAKATA : Rausu Municipal Museum
Norio TANIUCHI : Rausu Municipal Museum
Isao NOZAWA : Research Association of MATSUURA, Takeshiro
V. M. SUKOVATITSYNA : Yuzhno-Kurilsk Regional Museum
